

道を分けてもつながる絆。



創立150周年を迎えた大谷中学・高等学校。その節目に集ったのは、野球部で青春を共にした二人の卒業生だ。一人は20代で起業し、世界270拠点に展開する会社を率いる伊井田栄吉さん（写真左）。もう一人は、早稲田大学野球部を経てトヨタ自動車硬式野球部で活躍した佐々木雅次さん（写真右）。

ビジネスとスポーツ、異なる道を歩んだ二人に共通するのは、高校時代に育まれた「チームと仲間」の大切さ。節目の年に二人が語る高校時代の記憶と、そこからつながる現在、そして未来へのメッセージとは。

大谷で出会った一生の仲間

伊井田 栄吉（以下、伊井田）　そうですね。野球部の強化策として声をかけてもらった、というのが正しいのかな。僕の場合は二つ上の兄が大谷高校に在学していたので、その縁もあって大谷に入ることを決めました。

佐々木 雅次（以下、佐々木）　僕は中学時代から野球をやっていて、大会で優勝したときにいくつかの学校から声をかけてもらったんです。そのなかで最初に評価してくれたのが大谷高校で、一番に声をかけてくれたところに恩義を感じて、入学を決めました。

——では、新入生のときからのお付き合いなんですね。

佐々木　そうですね。伊井田とは入学式の日初めて会って、終わってから他の部員たちと「ちょっとお茶でも行こうか」なんて話をした記憶があります。

伊井田　当時は部員がとにかく多くて、60人以上いたんじゃないかな。そのなかで、ある程度レギュラー候補は決まっている雰囲気があって、僕らはそのメンバーの一部でした。

佐々木　当時、大谷には京都府内の中学でベスト8やベスト4まで進んだチームのメンバーがたくさん集まっていたんです。だから「おお、あいつも大谷か」と、お互い意識し合っていました。中学時代はライバルだった仲間が、今度は同じユニフォームを着るわけですからね。



20代で起業し、事業を通じてさまざまな文化に貢献している伊井田栄吉さん。

——まるで漫画のような出会いですね。お二人のポジションはどこだったんですか？

伊井田 僕はセンターでした。故障ばかりで全然ダメでしたけど。何と云ってもうちのチームは、佐々木が4番でエース。1年生の後半にはもうレギュラーでしたから。彼で負けたらどうしようもなく、今で言う大谷翔平みたいな存在ですよ。しかも左打ちで、当時のグラウンドは狭かったから、打球が電車の線路を越えてしまうこともあったんです。

佐々木 そうそう、よく越えてましたね。レフトは距離があったけど、ライトは近くに電車が走っていて、その向こうの民家の屋根に何本も打球が飛んでいました(笑)。

忘れられない最後の夏の試合



「実は僕はあまり野球が好きではなかった」と語る伊井田さん。それでも続けたのは、仲間と監督に支えられたから。

——チームとして過ごした3年間の中で、特に印象に残っている出来事がありますか？

伊井田 もう細かい記憶はだいぶ薄れてきていますが、やっぱり最後の“平安戦”ですね。あの大会は特別でした。実は部員の一人が不祥事を起こしてしまって、その前の秋と春の大会に出場できなくなってしまったんです。だから、僕らは夏の大会がぶっつけ本番。しかも相手は強豪の平安高校。彼らの戦い方を知ろうと必死に情報を集めたりもしましたが、結局みんなスランプで、コンディションを整えきれないまま本番を迎えました。

佐々木 あれは確か準々決勝で、僕らにとって最後の夏でもありました。前年の一件で甲子園を狙えるチャンスを二度も失っていて、残されたのはこの大会だけ。しかも、相手の平安は春のセンバツでベスト8か4まで勝ち上がっていたんです。

伊井田 たしか京都新聞にも“事実上の決勝戦”と書かれていたんじゃないかな。優勝候補同士の対決だと言われていたけれど、僕らは全員コンディションがバラバラで、打てないし調子も出ない。「優勝しなきゃいけない」という重圧がのしかかるなか、僕自身は腰を痛めて月に一度は寝込むような状態でした。でも、あのときに仲間に支えられました。休まざるを得ないときも、文句ひとつ言わずにカバーしてくれて。とても苦しい試合でしたが、あの夏は忘れられませんね。



当時の大谷高校野球部の中心選手だった佐々木雅次さん。現在も後進の指導を続けるなど、野球一筋の人生を貫いている。

——すでに深い絆が伝わりますね。でも、部活を途中で辞めてしまう人も多かったとか？

佐々木　そうですね。タテ社会の厳しい雰囲気を見て、自分には無理だと辞めてしまう人も多かったです。コーチに怒られた翌日に、部員が半分くらい辞めたこともありました。あの時代はどこの高校もそんな感じだったと思います。

——そんななかでも、お二人は続けられたんですね。

佐々木　せっかく入れていただいたところなので。

伊井田　佐々木は本当に野球が好きでしたからね。僕は、「仲間と一緒にやる」ということを決めていたから続けられたんだと思います。故障でみんなと同じ練習ができないことも多くて、何度も辞めようかと思いましたが、結局辞めなかった。最後まで試合に出られたのは本当に幸せでしたが、やっぱり佐々木が一人でがんばってくれていた印象があります。監督の梅谷先生は相当苦労されたと思いますよ。梅谷先生は本当にいい先生で、僕が腰を痛めて悩んでいたときも、「辞めるな、休んでまた戻ってこい」と言ってくれました。続けられたのは先生のおかげでもあります。いま一番会いたい人といえば、梅谷先生ですね。

佐々木　僕も最近は会っていませんが、以前はよくお会いしていました。実は、僕の仲人でもあるんですよ。先生にも久しぶりにお会いしたいですね。

苦楽をともにして生まれた強い絆



当時の試合の状況を細かく覚えている佐々木さんに、「そんなことよう覚えとるなあ」と感心する伊井田さん。

伊井田 先ほども話したように、僕らにとって佐々木はヒーローでした。「佐々木で負けたら仕方ない」とみんなが思っていて、それだけ信頼されていたんです。キャッチャーの武村高行くんがキャプテンで、佐々木がエースピッチャー。二人のコンビにチームは任せきりで、僕はセンターから、そのサイン交換をずっと見ていました。

佐々木 懐かしいですね。僕は武村のサインに一度だけ首を振ったことがあるんですよ。覚えてたのフォークを投げてみたくて。試合自体は負けましたが、三振を取ったあのボールは今でも鮮明に覚えています。

——今も当時の仲間で集まったりされますか？

佐々木 たまに会っていますよ。ただ、伊井田さんはお忙しくてなかなか(笑)。

伊井田 実は僕は一度も集まりに出たことがないんですよ。毎回電話がかかってきて、「なんで来なかったんや！」と言われていました(笑)。

——お話を聞いていると、佐々木さんはとにかく「野球が好き」でそのまま野球を続けられて、伊井田さんは「仲間」や「チーム」という言葉が印象的で、そこからビジネスの道に進まれた。お二人の道は、高校時代に培われていたのかもしれませんがね。

伊井田 そうですね。僕は結局事業の世界に進みましたが、佐々木は大学、社会人とスポーツの道で生きてきた。まったく違う環境ですが、高校の3年間は言わば軍隊みたいなもので、一緒に苦しい時間を過ごしました。だからこそ、良くも悪くも強い信頼関係が残っているんだと思います。当時は今と違って、水も飲めないし、ウサギ跳びを延々とやらされて、倒れるまで練習した。終わったあとには「よくがんばったな」という暗黙の空気があって、みんなで乗り越えていたんです。

佐々木 そんなこともありましたね(笑)。でも、理不尽なことばかりではなくて、我々の代は野球に集中していたと思います。1年間の出場停止を経験した世代だから、とにかく試合に勝つことに必死で、後輩にあれこれ言っている余裕なんてなかった。だからこそ、仲間意識が強かったんだと思います。伊井田が言うように、「仲間として一体になる」という感覚を持てたのは、あの1年間の苦労があったからでしょうね。自分たちで背負った辛さが、結果的にチームの絆を強める糧になったんじゃないかな。



<PROFILE>

伊井田栄吉 **Eikichi Iida** (左)

京都府生まれ。大谷高校野球部で培ったチームワークを礎に、1981年に第一創業として株式会社ミクニを設立し、1993年に第二創業として現在の株式会社ワールドホールディングスを設立。人材・不動産・新規事業を多角的に展開し、世界270拠点に広がるグループ企業へと成長させた。現在も現役の事業家として、「仲間」「心」「和の文化」を重んじる日本独自の価値観を基盤とした企業経営を続けている。

佐々木雅次 **Masatsugu Sasaki** (右)

京都府生まれ。大谷高校野球部ではエースで4番を務め、チームの中心として活躍。高校卒業後は早稲田大学に進学し、野球部在学中にリーグ優勝も経験した。その後、トヨタ自動車硬式野球部に入部。海外業務なども経験し、仕事と野球の両立を実践。引退後も社会人野球界の発展に携わり、現在は大学野球のマネジメントや後進の指導を続けている。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto

